

萩原朔太郎「東京遊行詩篇」考

渡辺和靖

Kazuyasu WATANABE

社会科教育講座 (思想史)

先に拙著『萩原朔太郎 詩人の思想史』(ベリかん社, 1998年8月)の刊行に際して、頁数の関係で割愛せざるをえなかった部分について、ここで改めて考察を展開したい⁽¹⁾。

拙著は、思想形成の観点から朔太郎の作品を考察したものであり、その結果、制作年次不明の作品の制作年次を数多く明らかにすることに成功した。この方法はこの後もさらに多くの展開が可能であると信じている。ここでは、同じ方法によって、「愛憐詩篇」、〈疾患〉詩篇、「浄罪詩篇」など、従来知られていたシリーズ以外に、活字化された作品には示されていないが未発表作品や草稿類において秘かに構想されていた「東京遊行詩篇」と題するシリーズの存在について明らかにしたいと思う。

1 「遠景」と「狼」そして「疾患光路」

1915年(大正4)1月に萩原朔太郎は、7つの雑誌に新作・旧作とり混ぜて、合計23篇の作品を発表している。そのなかで『詩歌』に掲載された「遠景」(『月に吠える』では「かなしい遠景」と改題)と「狼」(『蝶を夢む』収録)には、末尾にそれぞれ「——その一——」「——その二——」という付記が付されている。詩集に収録する際に抹消されたこの付記については、従来、朔太郎研究の多くが詩集に収録されたものに依拠し、その初出や草稿についてはあまり関心を払っていないという事情もあって、ほとんど言及されてこなかった⁽²⁾。

はじめに「——その一——」の付記のある「遠景」から検討していく⁽³⁾。

哀しい薄暮になれば、
労働者にて東京市中が満員なり、
それらの憔悴した紫色の顔が、
巷街中いちめんひろがり、
あつちの市區でもこつちの市區でも、
堅い地面を掘つくりかへす、
掘り出して見るならば、
煤ぐろい嗅煙草の銀紙だ、
重さ五匁ほどもある、
にほひ董の干からびきつた根の株だ、
それも本所浅草あたりの遠方からはじめ、
東京市中いちめんにおよんで、
空腹の労働者がしやべるを光らす。

「堅い地面を掘つくりかへす」というフレーズに示された、地面を掘るというイメージは、『月に吠える』に収録された最も制作年次の早い作品でもある『詩歌』1914年9月号に掲載された、「——一九一四、八、三——」の日付のある、「感傷の手」にはじめて出現するものである⁽⁴⁾。

わが性のせんちめんたる、
あまたある手をかなしむ、
手はつねに頭上に跳り、
また胸にひかりさびしみしが、
しだいに夏おとろへ、
かへれば燕はや巢を立ち、
大麥はつめたくひやさる。
ああ都を忘れ、
われすでに胡弓を弾かず
手ははがねとなり、
いんさんとして土地を掘る、
いちらしき感傷の手は土地を掘る。

「感傷の手」において、土地を掘るというイメージは、故郷にあることの不快感を表現するものであった。その点、「遠景」に示された東京の労働者のイメージとは微妙に異なっている。むしろ「遠景」は、〈疾患〉のモチーフが故郷にあることの不快感から離れ、一つの神経的な幻想として自立した、「磨かれたる金属の手」(『詩歌』1914年11月)や「疾患光路」(『水鏡』1915年1月、「——十月作——」の日付)などと同じ時期、1914年10月頃に制作されたものと考えられる⁽⁵⁾。

「遠景」には草稿が残っている⁽⁶⁾。

東京市中の労働者、
光るしやつばの労働者、
市中いつばいにひろがりひろがりかたい地面を掘りかへす
みんなそろつて、
〈えんやらやつと〉土地を掘る、
あつちでもこつちでも町いちめん掘つくりかへす
掘りあげて見たら、
すすぐろい嗅煙草の銀紙だ、
にほひ董のしなびた根株だ、
くもり日の疲れきつた〈空□の哀しい心で〉心で
夕ぐれどきの〈疲れきつたところで、〉

遠い労働者がしやべるを光らす。

「地面を掘りかへす」「土地を掘る」「掘つくりかへす」と、地下へ向かうベクトルが前面に出ている。これは、「遠景」が発想されたのが、「感傷の手」とほぼ同時期であったことを示している。「東京遊行詩篇」の出発点を確認することができる。しかし、やがて、その後の思想傾向の変化にともなって、書き改められていったのであろう。

定稿では削除されたが、この草稿の「光るしやつばの労働者」というフレーズに着目するならば、「遠景」は、「鈴蘭」1914年11月号に掲載された「ぎたる弾くひと」と関係がある⁽⁷⁾。

ぎたる弾く
ぎたる弾く
ひとりしおもへば
たそがれは音なくあゆみ
石造の都会
またその上を走る汽車 電車のたぐひ
それら音なくして過ぎゆくごとし
わが愛のごときも永遠の歩行をやめず
ゆくもかへるも
やさしくなみだにうるみ
ひとびとの瞳は街路にとちらる。
ああ いのちの孤独
われより出でて徘徊し
歩道に種を蒔きてゆく
種を蒔くひと
みづを撒くひと
光るしやつばのひと そのこども
しぬびあるきのたそがれに
眼もおよばぬ東京の
いはんかたなきはるけさおぼえ
ぎたる弾く
ぎたる弾く。

ここには地下へ向かうベクトルはほとんど見られず、はるかに東京を思いながらギターを弾く、孤独な思いが歌われている。前橋にあってはるかに東京を懐かしむ朔太郎の姿がある。

残された「ぎたる弾くひと」の草稿を見ると、冒頭部分はほぼ同じで、後半が以下のようになっている⁽⁸⁾。

み空に工場の煙ながれゆきかひ、
魚肉のにほひ、
まだ知らぬ食慾をいぎなふたはかれ、
ゆくもかへるも、
やさしく涙にうるみ、
ひとびとの瞳は街路にとちらる、

これを見れば「ぎたる弾くひと」に歌われているものが東京に生活することの楽しさであることがよく分かる。「いのちの孤独」という言葉が見えるが、これも、東京への憧れが逆に故郷にあることの息苦しさを意識

させることを表現したものと理解される。

これらの作品を踏まえるならば、「遠景」を単純に労働者たちの苦しい生活を歌ったものと理解することはできない。

ところで『萩原朔太郎全集』——以下『全集』——第1巻の註記によれば、「遠景」のこれとは別の草稿に「(東京遊行詩篇, 3)」という付記があるという⁽⁹⁾。

このことを考え合わせると、「一」と「3」では数字が合わないが、「——その一——」が「東京遊行詩篇 その一」を意味するものであると判断することができる。雑誌発表に際して、草稿で仮に付した番号を改めたものと推測される。

つぎに「——その二——」の日付のある「狼」について考察する⁽¹⁰⁾。

見よ、
来る、
遠くよりして疾行するものは銀の狼、
その毛には電光を植え、
いちねん牙を研ぎ、
遠くよりしも疾行す、
ああ、狼のきたるにより、
われはいたく怖れ哀しむ、
われはわれの肉身の裂かれ鋼鉄となる薄暮を怖る、
きけ、浅草寺の夕ぐれの鐘鳴りやまず、
そゝろに我は畜生の肢体をおそる、
怖れつねにかくるゝにより、
なんびとも素足を見ず、
されば都にわれの過ぎこし方を知らず、
かくしもおとろへしけふの姿にも、
狼は飢え牙をとぎて来れるなり、
あゝわれは怖れかなしむ、
まことに混閨の都にありて、
すさまじき金属の、
疾行する狼の足音を怖る。

「遠景」が「東京遊行詩篇 その一」であるとすれば、「狼」の付記「——その二——」が「東京遊行詩篇 その二」を意味するものであることは疑いない。この作品には、「浅草寺」という地名が出ており「東京遊行詩篇」と呼ぶに相応しいものとなっている。

「狼」にはいくつかの草稿が存在している。その一つは「祈願」と題されている⁽¹¹⁾。

夕ぐれかけていつさんにきた《れる》るものは
もとめ《きたる》あくなきものは《乞食→畜生》
狼なり
その毛に、《はがね》電光をうえ、牙を研ぎ、
われを喰みわれを殺す、
《もとめえざるものは乞食なり》ああわれはおも
う
《いのれしからずんば《死がい》か》乞食の手より》

われはわれの肉身のはがねとなる夕をおそる
 〈そのすぎこし方を知らず〉
 きけ夕の鐘鳴りやまず
 〈きけ上野東叡山の〉きけ浅草 〈の夕の〉 寺の鐘
 こんこんと鳴りもやまず
 そゞろに我は畜生の心をおそる
 〈その〉 さればわがすぎこし方を知らず
 なんびとも素足を見ず
 〈われはわれの天上にあり
 畜生の心を知らず
 乞食の心を感じず
 いはんや
 せんちめんたるの子
 合掌していんよくの路をたどる〉
 かくしもおとろへはてし我の 〈心に〉 瞳に
 狼は牙をとぎて来れるなり、
 まことにわれはおそる
 〈遠くより〉 都にありてすさまじき 〈どんよくの〉
 靈感のけものをおそる、

これで見ると「狼」は、はじめ「乞食」あるいは「畜生」というモチーフで作品が構想されていたことが分かる。「畜生」については、後に引く「疾患光路」の「犬、畜生をして純銀たらしむる」という一行との類縁を感じさせる。「乞食」については、後に引く室生犀星の「室生犀星氏」の「ひとくれの麦をひろはむとする乞食のころ」という一行が参照されているように思われる。

さらに「せんちめんたるの子」という一行は、同じく「疾患光路」の「疾患せんちめんたる夕ぐれの路」との類縁を感じさせるし、さらに「いんよくの路」は、「疾患光路」の「邪淫の路」と類縁がある。「狼」は「疾患光路」と同じモチーフを基にして制作されたものであると判断することができる。

もう一つ「狼」の草稿を引く。これは無題である⁽¹²⁾。

〈狼きたる〉
 〈ああ〉 みよ狼きたる、
 〈この薄暮靈感のあひだ、薄暮閃光のあひだ
 〉遠くよりましぐらに疾行する〉
 〈みよ〉 遠くよりして疾行するものは 〈靈感の〉
 銀の狼 〈なり、〉
 その毛には電光をうゑ
 いちねん牙をとぎ
 われを喰みわれを殺さむとす
 〈われ〉 ああ狼のちかづくにより
 われはいたくおそれ哀しむ、
 われはわれの肉身の裂かれ鋼鉄となる薄暮をおそる、
 きけ 〈上野〉 浅草寺の 〈夕べ〉 ゆうぐれの鐘鳴り
 やまず
 そゞろに我は 〈狼〉 畜生の肢体をおそる
 おそれつねに 〈のがる〉 かくるゝにより

なんびとも素足を見ず
 されば都に我のすぎこし方を知らず
 〈かなしみ〉 かくしもおとろへし今日の 〈瞳にも〉
 姿にも
 狼は尚牙をとぎて来れるなり
 ああわれはおそれ哀しむ、
 まことに雑圃の都にありて
 すさまじき靈感のけものをおそる、

この段階になると、狼のイメージが前面にせり出してきている。しかし、ここでも、例えば「〈靈感の〉銀の狼〈なり、〉」というフレーズには、「疾患光路」の「犬、畜生をして純銀たらしむる」というフレーズと近いものが感じられる。

おそらく「狼」と「疾患光路」とは、おなじ原型から発展した2つの作品であり、「疾患光路」は「東京遊行詩篇」の付記はないが、「狼」と同じく、「東京遊行詩篇」の1つとして意識されていたものと推測される。

『水鏡』1915年1月号に掲載された「疾患光路」を引く。末尾に「——十月作——」の付記がある⁽¹³⁾。

我れのゆく路、
 菊を捧げてあゆむ路、
 いつしん供養、
 にくしんに血をしたたらすの路、
 肉さかな、きやべつの路、
 邪淫の路、
 電車軌道のみちもせに、
 犬、畜生をして純銀たらしむる、
 疾患せんちめんたる夕ぐれの路、
 ああ、素つばだかの聖者の路、

「菊を捧げてあゆむ路」という一行は、後に引く「銀座の菊」などの未発表詩篇との関係を考えるうえで興味深い。「狼」と「疾患光路」が共通の源泉をもつことを証する一つである。

この作品のほぼ完成に近い草稿で、末尾に「一九一四・一〇」の日付のある「道路」という未定稿が書かれた原稿用紙の余白部分に、

〈いたい、いたい
 〉みろ、やせぎすの狼だ、
 〈涙〉 いたむゆびのさきを日輪をさす
 いたい いたむ
 いたむ
 いたむ、いたむ、〉

と記されている⁽¹⁴⁾。ここにも「狼」の文字が見られることは注目し得る。

「狼」は、故郷にあることの不快感を身体的な痛みとして表出した〈疾患詩篇〉の流れ中で、身体的な痛みとしての〈疾患〉が故郷というその出自から離れ、神経的な幻想として自立するに至った段階で成立したといえる⁽¹⁵⁾。「牙を研ぎ」「飢え」などの言葉には、〈疾患〉のモチーフが示されている。「疾患光路」は、都会

的なイメージを背景として〈疾患〉のモチーフが展開されており、「東京遊行詩篇」はこうした時期に制作されたのである。

II 「晩景」と「孝子実伝」

制作年次不明の未発表作品「晩景——エレナに與ふ——」には、末尾に「——東京遊行詩篇、四——」の付記が付されている⁽¹⁶⁾。

青らみしだいに、
北極圏の光を感ず、
〈東京市中いづこを行くも、〉
〈街頭〈氷ながれ、〉を氷山の〈ながれを〉はざまに鳥鳴も〉
〈都をいづれ〉都をいづれわが行くも
〈往来〉往来、〈都に〉氷山の〈ながれ〉峯光り
〈〈その〉また〉いただきに花鳥〈のけはひ〉を薫ずる夕げしき
〔金の粉雪さんさんたり、〕
〔さめざめとふる金の雪〕
ああ、かくてしもわが身のおとろへ、
肉身をこえて涅槃に入るか、
〈〈まつ〉けふ〉いと遠くよりわが〈が〉れの手をのべ、
〈ひとへに愛人の乳房をまさぐる、〉
しんじつひとへに君におよぶのゆふまぐれ、
〔〈この〉この浅草に紙製の菊をつみ、
〈いま〉いま哀しき十月をこえて、
ひとしきたり〔紙製〕の菊をつまむと
〔早咲〕〕
銀座四丁目動工場の窓〈をこえ〉よりすぎて
〈はげしき〉すさまじき接吻をおくらむ、
われらの指凍る。

東京を背景として「おとろへ」「凍る」など〈疾患〉のモチーフが歌われている。しかし、同時に、「花鳥のけはひ」という春へ向かう明るい傾向もほの見えている。この作品も〈疾患〉詩篇末期の作といえることができる。

この作品には「晩景——えれなに送る——」と題する草稿が存在する⁽¹⁷⁾。

青らみしだいに
〈北〉北極圏の光を〈感ず〉薫ず
〈こゝの〉いづこを行くも
街頭、氷ながれ
金のこなゆきさんさんたり
ああ、かくてわが身の〈涅〉おとろへ
肉身をこえて涅槃〈を感ず〉に入るか
〈遠く〉まつわが手をのべ
〈えれ〉ひとへに愛人の乳をまさぐる
〈いのりいつしんに〉しんちつきみくよきたれの祈願なり〉におよぶの夕まぐれ

この〈遠き〉東京に菊をつみ
いま哀しき十月をこえて
はげしき切吻をおくらむ
われらの指こほる、

『全集』ではこの作品を先の作品の草稿として処理しているが、むしろ逆で、この作品は先の作品を整理したものと推測される。「くえれ」は、おそらく「えれな」と書こうとして抹消したものであろう。先には「えれな」の名を隠して「愛人」と書いて、ここで再び「えれな」と書こうとして、結局「愛人」と書き改めた微妙な心の動きが手に取るように感じられる。

「晩景」の「ああ、かくてしもわが身のおとろへ」というフレーズは、「狼」の「かくしもおとろへしけふの姿にも」という部分と、肉体の衰えという点で共通している。

エレナへの献辞をもつ「晩景」という作品の存在は、「東京遊行詩篇」というシリーズが、朔太郎のエレナへの愛情の高まりと密接に関係していることを示している。そこには、後に述べるように、朔太郎が東京の詩人仲間との交遊において、室生犀星の春子に対する恋情などを媒介として、エレナへの思慕を深めたという事情があったように思われる。つまり、この段階で「晩景」は「東京遊行詩篇」の一つとして意識されていたということであろう。

ところで「晩景——エレナに與ふ——」が書かれた原稿用紙の末尾には「(東京遊行詩篇一、二、三の三篇は〈十二月〉地上巡礼十二月号にあり、)」と註記されている⁽¹⁸⁾。

『詩歌』と『地上巡礼』とでは雑誌名が符合しない。これは朔太郎が送稿後、まだ雑誌が刊行される前の段階で記憶が不確かなまま「十二月」と書き、さらにうる覚えで「地上巡礼十二月号」と書き改めたものと考えられる。いずれにしろ「遠景」が「東京遊行詩篇 一」であり、「狼」が「東京遊行詩篇 二」であることは疑いないだろう。そして「東京遊行詩篇 三」とは、おそらく、その付記は見られないが、「遠景」「狼」と同時に『詩歌』1915年1月号に掲載された、末尾に「——十一月作——」の日付のある「孝子実伝——室生犀星に——」であると推定される⁽¹⁹⁾。

ちゝのみの父を負ふもの、
ひとのみの肉と骨とを負ふもの、
あゝ、なんぢの精気をもて、
この師走中旬を超え、
ゆく〜霊魚を獲んとはするか、
みよ水底にひそめるものら、
その瞳はひらかれ、
そのいろこは凍り、
しきりに霊徳の孝子を待てるにより、
きみはゆくゆく涙をながし、
そのあつき氷を踏み、

そのあつき氷を喰み、
 そのあつき氷をやぶらんとして、
 いたみ切齒^{はがみ}なし、
 ゆくゆくちゝのみの骨を負へるもの、
 光る銀絲の魚を抱きて合掌し、
 夜あけんとする故郷に、
 あらゆるものを血まみれとする。

室生犀星について歌ったものであり、しかも、作品中には「父」「故郷」という語が見える。東京を舞台としたものとは考えにくい作品である。

しかし、『全集』で「室生犀星に——十月十八日、某所にて——」と仮に題された、無題の制作年次不明の未定稿は、明らかに「孝子実伝——室生犀星に——」の原型と推定されるが、その中には、明確に東京が登場している⁽²⁰⁾。

ああ遠き室生犀星よ
 ちかまにありてもさびしきものを
 〈親〉 肉身をこえてしんじつなる我の兄
 〈しんじつなる我の兄〉
 君はいんらの賤民貴族
 魚と人との私生児
 人間どもの玉座より
 われつねに合掌し
 いまも尚きのふの如く日々に十銭の酒代をあたふ
 遠きになればいやさらに
 恋着〈せち〉日々になみだを流す
 涙を流す東京麻布の午後の高台
 かがふる怒りをいたはりたまふえらんだの椅子に
 泣きもたれ
 この遠き天景の魚鳥をこえ
 狂気の如くおん身のうへに愛着す
 ああわれ都におとづれて
 かくしも痴愚とはなりはてしか
 〈わが身をくみて流涕す〉
 いちねん光る松のうら葉に
 うすきみどりのいろ香をとぎ
 涙ながれてはてもなし
 ひとみをあげてみわたせば
 めぐるみ空に雀なき
 犀星のくびとびめぐり
 めぐるみ空に雀なき
 犀星のくびとぶとびめぐり
 涙とゞむる由もなき
 涙とゞむる由もなき。

この作品には「——〈とある日の〈午後〉の詠嘆〉——」
 「——〈ある日〉ある日〈にはかに〉ふと哀しくなりて——」
 「十月十八日巡礼詩社にて」「——十月十八日、
 〈巡礼詩社〉某所にて——」などと副題の構想された
 「〈遠き〉室生犀星に〈おくる〉」と題する草稿が残されている⁽²¹⁾。

〈友よ
 許してくれ〉
 ああ遠き室生犀星よ
 にくしんをこえて
 真実なるわれの兄
 〈〈その〉きみは〈人魚〉三体の瞳〉
 君こそはいんらの賤民貴族
 〈君は〉魚と人との私生児
 〈雀〉人間〈の〉どもの玉座より
 われつねに合掌し
 いまもきのふのごとく〈君〉日々に〈葉〉十銭の
 酒代をあたふ
 遠きになればいやさらに
 恋着せるに涙をながす
 涙を流す東京麻布の午後〈エランダ〉高台に
 たかふる怒りをい□□りたはりたまふ
 〈やさしくはぐゝむおんあい〉えらんだの椅子に
 泣きもたれ
 〈齒光り〉この遠き天景の魚鳥をこえ
 〈愛はつゝましく人と〈兄〉兄と母とを礼拝す〉
 狂気のごとくおん身のうへを礼拝す
 ああ〈き〉われ都〈にきたり〉におとづれて
 かくしも痴愚とはなりはてしか
 〈この〉みよやいちねん光る笹の葉うらに
 〈松の〉うすきみどり〈ば〉のいろ香をとぎ
 わが身をくいて流涕す
 〈〈空気〉のうへに〉火のを見をこえ空めぐるみ空
 〈は〉に雀なき
 犀星のくびとびめぐり
 めぐるみ空に雀なき
 犀星のくび〈はわれを呼ぶ〉とびめぐり
 〈ああ手をもて顔を蓋へども〉
 涙とゞむるよしもなき、涙とゞむるよしもなき
 〈ああわれ都にいできたり
 かくも痴愚とはなりはてしか
 兄よしんじつ我れをば許せかし
 ああ恋しきわが兄上犀星よ
 〈兄〉涙をながす〈椅〉エランダの
 おん念一路の椅子のうへ
 〈もろ手を顔に押しあてゝ泣けるなり
 きみ〉
 懺悔無量のわがこゝろ
 声をしのびて
 けふ〈は〉も〈半ば〉泣〈きける泣〉けるなり、
 声をしのびて泣けるなり、

ここにも「東京麻布の午後の高台に」と東京が歌われている。

これらの草稿の存在、そして犀星は東京在住であり、またこれ以外に他に適当な作品が見あたらないことなどを考え合わせれば、「孝子実伝」には東京についての

具体的な言及は見えないが、それが「東京遊行詩篇三」であることは間違いないところであろう。

また、「孝子実伝——室生犀星に——」には、別に「孝子伝の第一人（犀星ニ）」と題する以下のような草稿が残されている⁽²²⁾。

〈はるかに来り〉

〈われ〉ひとの父を負ふもの

肉と骨を負ふもの

われと汝の精気をもて

ああ師走なかばをこえ

〈氷をわり魚をえんとはするか〉

ゆくゆく〈氷〉魚を獲んととはするか

氷を〈わり〉ふみ、氷をわり、

〈〈肉〉血〈み〉にまみれ〉

いたみはがみなし

ひとの子の父を負ふものら

〈手にかたく〉銀緑の魚を抱きて

みよ〈二人〉長き道路に〈血まみれとなる〉坐し

その光る手は血まみれとなる、

この作品には、「骨」「わり」「血」「いたみ」「はがみ」「血まみれ」など〈疾患〉のモチーフが前面に出ている。これは「孝子実伝」が、「室生犀星に——十月十八日、某所にて——」やその草稿「〈遠き〉室生犀星に〈おくる〉」から、東京遊行詩篇的な部分を削除して成立したことを示している。その意味では、「孝子実伝」を「東京遊行詩篇」と呼ぶのは正確でないかも知れない。雑誌発表に際して朔太郎が「東京遊行詩篇」という付記をしなかったのもそのためであろう。しかし、それが初めは「東京遊行詩篇」として構想されたものであるということだけは記憶しておく必要があるだろう。

「孝子実伝」にかかわるこれら一連の作品は、「詩歌」1914年5月号に掲載された、犀星の「室生犀星氏」という作品を意識したものになっている⁽²³⁾。

みやこのはてはかぎりなけれど

わがゆくみちはいんいんたり。

やつれてひたひあをかれど

われはかの室生犀星なり。

脳はくさりてときならぬ牡丹をつづり

あしもとはさだかならねど

みやこの午前

すてつきをもて生けるとしはなく

うつとりとあゆめるは室生犀星なり。

ねむりぐすりのねざめより

眼のゆくあなた縁けぶりぬと

午前をうれしみ辿り

うつとりとうつくしく

らくいん貴族に及ぶ室生犀星なり。

らくいん貴族に及べども

ひとくれの麦をひろはむとする乞食のころ。

たとへばひとなみの生活をおくらむと

なみかぜ荒らきかなたを歩む室生犀星なり。

されどもすでああ四月となり

さくらしんじつに燃えれうらんたれど

れうらの賑はひに交はらず。

賑はひを怨ずることはなく唯うつとりと

すてつきをもて

つねにつねにただひとり

きんしん無二の坂の上

くだらむとする室生犀星なり。

たとえば十にもみたぬをとめぐにかんげきし

あけくれあたまなやまし

つくづくとものおもふ

せんちめんたるの児われは室生犀星なり。

あけくれ多きともどちら

ひにくを超えてしんしんといとしがり

まつちのれつて

紅えんえんたるを送りくる。

ときにあしたより

とをくみやこのはてをさまよひ

ただひとり、うつとりと

息絶えむことを専念す

らくいん貴族の

せんみんの

われはかの室生犀星なり。

ああ四月となれど

桜を痛めまれなれどげにうすきゆき降る。

哀しみ深甚にして座られず。

たちまちにしてかんげきす。

すてつきをもて

桜の下にしぬびより

おんみ、さぞさぞ痛からめ

かんぜよ、けいけん苦節をもてけふれるわれ。

青冷一魂となりたるの

われはかの室生犀星なり。

犀星が、東京での暮らしの苦しさを歌った作品である。「孝子実伝」は、犀星の作品に触発されつつ、朔太郎自身の東京での暮らしをモチーフにしたものであり、その意味では「東京遊行詩篇」ははるかに東京の室生犀星を思うというモチーフを含んでいたことが知られる。「山に登る 旅よりある友に送る」(『感情』1917年1月、『月に吠える』収録)にも見られるように、朔太郎にあって、犀星への友情とエレナへの愛情がしばしば混同するところがあったことは周知のところである⁽²⁴⁾。

III 「銀座の菊」と「蝕金光路」

「晩景——エレナに与ふ——」以外にも、「東京遊行詩篇」という付記のある制作年次不明の未定稿がいくつか残されている。

未発表作品「銀座の菊」には「(東京遊行詩篇、1)」

の付記がある⁽²⁵⁾。

都に灯ともり、
おとろへはててわれあゆむ、
金の粉ゆき途にふり、
恋魚のめざめこそばゆく、
しみじみと銀座の街に鳴き出づる、
あはれくつわ虫なくものを、
また空には光るまつ虫、
おほいなる紙製の花もひらくころほひに、
につけるの雲雀かがやく銀座四丁目三丁目。
なやましげなる宵にしあれば、
こよひ一夜勤工場の窓に泣きぬれて、
あしたの菊をぞわれ摘まむ、
あしたの菊をぞわれ摘まむ。

「銀座四丁目三丁目」と具体的に東京の地名が出現するほか、「おとろへ」という語は、「狼」「晩景」などに共通する。

「銀座の菊」には「銀座通の菊」と題する草稿があり、表記を除けばほとんど異同はないが、六行目と七行目の間に以下のような部分があり、定稿では削除されている⁽²⁶⁾。

おほくひいなる { <酒毒の> 紫蘇の花くも }
 { 咲くころほひ }
 { 紙製の花のひらくころほひ }

<疾患せんちめんたる歯痛の夕ぐれに、>

疾患いるみねえしよんの夕ぐれに

ここに見える「<疾患せんちめんたる歯痛の夕ぐれに、>」という部分は、先に「狼」を論じたさいに引いた、「疾患光路」の「疾患せんちめんたる夕ぐれの路、」という一行と照応している。さらに指摘すれば、「疾患光路」の草稿「道路」には、「歯痛のみち」の一行があり⁽²⁷⁾、「銀座の菊」草稿の「歯痛の夕ぐれ」に対応している。「疾患光路」が「東京遊行詩篇」の一つであることを証するものである。

さらに「銀座の菊」草稿の「疾患いるみねえしよんの夕ぐれに」という部分は、制作年次不明の無題の未定稿と関連がある⁽²⁸⁾。

TANGO をどれ、
広間の壁は真鍮張りだ、
みつめる酒場の床に砒素の粉末を光らす、
空いちめんの蜂巢蠟燭くが俺をが眩惑する、
爾の円筒帽をしてまつびるまのやうに輝やかしむる夜の世界だ、
<浅草だ> 精霊電気の浅草だ、
見ろ、光る<人間> 金属の手は血だらけだ。

兄弟、
もつと、もつと、しつかり抱きついて呉れ、いつまでも
抱きついてくれ

ああ、この哀しい、哀しい、むらさきの、酔ひど
れの路を忘れるな、
疾患いるみねえしよんの遠い遠い浅草の路を忘れるな。

ここでは銀座ではなく浅草が歌われているが、東京であることに変わりはない。

つぎに制作年次不明の未定稿「蝕金光路」には「東京遊行詩篇、四」の付記が付されている⁽²⁹⁾。

かくしもわが身のおとろへきたり、
肉身<を>を超えて涅槃に入るか、
その空さへも青らみ、
しだいに北極圏の光さしぐむ、
げにかかる日の街街の、
都をいつれにわが行くとても、
往来、<水> 氷雪の峯ながれ、
花鳥を薫する天上の、
よのつねならぬ夕げしき、
夕げしき、
ああ、われ都に疾患し、
いためるまでもきみ恋ひ恋ひて、
ひとりしきたり紙製の菊を摘まむと、
銀座四丁目、BAZAARの窓をすぎがてに、
けふの哀しき酒乱を超え、
すさまじき接吻をおくりなむ、
冬ならなくに金のゆきふる。

ちなみに、「晩景」と「蝕金光路」とは、「東京遊行詩篇、四」という付記が共通していることから知られるように、明らかに関係がある。おそらく「晩景——エレナに与ふ——」は、「蝕金光路」の草稿であろう。

「蝕金光路」に見える「紙製の菊」というフレーズは、さきに引用した「晩景」に、

ひとしきたり { 紙製 } の菊をつまむと
 { 早咲 }

とあり、やがて、「この<遠き>東京に菊をつみ」へと整理された部分と関係がある。同じく「銀座の菊」の「あしたの菊をぞわれ摘まむ、/あしたの菊をぞわれ摘まむ」という部分、「蝕金光路」の「ひとりしきたり紙製の菊を摘まむ」という部分などとも関係がある。

【全集】では、「蝕金光路」を「習作集第九巻」収録の無題の作品の別稿として位置づけている。両者を比較すると、わずかな差異を除いてほぼ同一の作品である。「蝕金光路」が「肉身<を>を超えて」「<水> 氷雪」など、添削の跡を残していることを考慮すれば、むしろ「習作集第九巻」所載のものを定稿とすべきであろう。

さらに、「顔」と題する制作年次不明の未定稿には「——東京遊行詩篇、五——」の付記がある⁽³⁰⁾。

浅草公園活動写真のくらやみに、
耳なき白き犬は殺されたり、

惨酷にも殺されたり、くしが、
殺されたる白き犬の幽霊を、くば、
プラチナの映画は繰返せり。

「顔」の末尾には「(東京遊行詩篇一、二、三の三篇は地上巡礼十二月号に所載)」という付記がある。これは先に引いた「晚景」の末尾の付記とほぼ同一であり、両者がほぼ同時期に制作されたものであることが知られる。さらに言えば、「晚景」の付記が推敲の跡を残しているだけ、「顔」よりも先に制作されたものと考えられる。

『全集』では、この作品と、「習作集第九巻」記載の「顔」との関係が指摘されている。しかし、比較すると、関係があるというよりもほとんど同一の作品であり、「蝕金光路」と「習作集第九巻」所載の無題の作品の関係と同じく、推敲の跡を残していることから考えて、「顔」は「習作集第九巻」所載の無題の作品が定稿であると言うべきだろう。「習作集第九巻」では「顔」は「蝕金光路」の定稿である無題の作品の前に並んでいる。「蝕金光路」が「東京遊行詩篇、四」であり、「顔」が「東京遊行詩篇、五」であることを考えれば、「習作集第九巻」に記入する時点で、すでに「東京遊行詩篇」というシリーズの枠組みは朔太郎の中で失われていたと思われる。

「習作集第九巻」で「顔」のさらに前に記載されている「狼殺し」と題する作品は、明らかに「東京遊行詩篇 其二」である「狼」と関係がある⁽³¹⁾。

疾患脊髄の心棒より光を発し
その反映をもて殺さんとする狼だ
ゆうべとなれば
素つ裸となして殺戮する狼だ
狼を血みどろにし
われの心棒をば血みどろにし
そこに菊をうえ
そこに松をうえ
そこに電針をうえ
その怖るべき疾行をとめ
狼をやぶり殺さんとして
われの心棒にも砒石をぬり
しづかにこらへきたらんとするの日暮をまてば
井戸の底にもその水のすべてを涸れつくしぬ、

狼が主題となっていることは勿論のこと、「その毛には電光を植え」と「そこに電針をうえ」、「薄暮」「夕ぐれ」と「ゆうべ」「日暮」などが近似するとともに、「疾行」という言葉が一致することが注意される。

「狼殺し」「顔」「蝕金光路」定稿は、「習作集第九巻」でも末尾の方に並んで収められている。1914年9月頃から11月頃までに制作されたと推定される。

IV 「東京遊行詩篇」の背景

1914年の前半、朔太郎はしばしば東京に遊んでい

る⁽³²⁾。

2月14日に室生犀星が東京から突然前橋にやってきて、1ヶ月ほど滞在して帰っていった。朔太郎はその後を追うように、3月下旬に上京し、犀星をはじめとして、北原白秋、河野慎吾、山村暮鳥などと交遊し、7月に前橋に帰郷した。

『全集』に収録された白秋宛の最初の「書簡」は、帰郷を知らせる7月17日付の葉書である⁽³³⁾。

在京中はたびたび御邪魔にあがり失礼いたしました。帰郷してから私はほんとにみじめな姿になりはてました。いちにち中ぢつと自分の書斎に座つてあさましいことばかり考へて居ります。それといふのもあんまり孤独にすぎるからです。周囲がさびしすぎるからです。

これ以後、朔太郎は、しばしば白秋に宛てて恋文のような書簡を發し、東京での交遊を懐かしんでいる。

9月4日には、白秋の著書『印度更紗』と雑誌『地上巡礼』を受領した礼状に、

此の一、二年来始めての法喜と随仰でした、私はあれを手に捧げたまゝ、部屋の中をぐるぐる歩きまわりました、(中略)あなたといふのが恋人のやうにもなつかしく教祖のやうにも尊とく見えたのです。

と書き送っている⁽³⁴⁾。

また、9月7日付では、「河野君から端書がきてあなたと新宿で痛飲したことを知らせて来ました、東京の社友をうらやましく思ひます」と、東京での生活を羨んでいる⁽³⁵⁾。

10月10日に朔太郎は上京し、22日まで東京で過ごしている。

10月14日付の白秋に宛てた葉書で朔太郎は、河野慎吾との決闘についてうれしそうに報告している⁽³⁶⁾。

決闘状は奇抜ですから御覧に入れます
原文ノ通り、 申込人、河野慎吾氏

はたしあひ申込
(はたしあひトハ西洋ノ決闘ノ意ナリ)

来る十五日午前七時本郷根津神社の裏広場に於てはたしあひ申込候也(得物はあまりありふれたるものは心宜しからずそれよりもか寧ろ赤裸々、裸一貫にて健闘いたし度候)

はたしあひ申込余録

はたしあひ当日此のハガキを持参されたし、

翌日と推定される葉書で朔太郎は決闘の結果について白秋に以下のように報告している⁽³⁷⁾。

急報

決闘ノ結果敵手ハ右足ニ大裂傷ヲ負ヒ余ハ左腕

ヲ挫折セリ鮮血リンリシタリ、
十五日午前九時十五分

10月23日付の帰郷に際しての葉書で、

在京中の御厚情は忘れることが出来ません。私の恋人が二人できました。室生照道と北原隆吉氏です。感慨きはまる。

妹さん、ばあやさんによろしく実に御迷惑をかけてすみませんでした。

と朔太郎は白秋に書いている⁽³⁸⁾。

帰郷してすぐ、10月24日と推定される手紙で朔太郎は、白秋に宛てて以下のように書き送っている⁽³⁹⁾。

わづかの時日の間にあなたはすっかり私をとりこにされてしまった、(中略)一日に二度も三度も御うかゞひして御仕事の邪魔をした私の真実を考へてください、夜になれば涙を流して白秋氏にあひたいと絶叫した一人のときの私を想像してください、

(中略)今では室生君と僕との中は相思の恋中である、こんな人はもはや二人とはあるまいと確信して居たのがあなたに逢つてから二度同性の恋といふものを経験しました、恋といつては失礼かも知れないが、僕があなたをしたふ心はえれなを思ふ以上です、

これ以後も朔太郎は、朔太郎は、前橋から東京の白秋へしばしば書簡を発している。

あなたはひどい、よつぱつらつたときばかり手紙をかくとは狡猾だ、(中略)僕にはほんとに酔ふことが出来ないんです、エレナの奴は手紙をやつても返事をくれないんです、北原さん、僕んとこへ来てください、やつぱり女より男がいい、男の方がすきだ、僕は哀しくて仕方がないんです、あした朝一番で前橋へきてください、僕は少しもよつて居ません、本気です⁽⁴⁰⁾、

朔太郎は白秋に前橋来訪を懇願している。これが実現するのは翌年の1月になる⁽⁴¹⁾。

10月24日の葉書に「いまSクラブ前橋支部の発会式をあげて居ます」とあり⁽⁴²⁾、10月28日の葉書にも「前橋S倶楽部探偵本部は目下活潑に活動中で、Sの方は本職に一任せられたし」とあるように⁽⁴³⁾、東京における白秋を中心とした詩人仲間のグループを前橋においても再現しようとしている。これも、朔太郎の東京への憧れを示すものである。

東京での乱痴気騒ぎを再現するように、郷里前橋でも朔太郎は羽目を外した莫迦騒ぎを繰り返す。同じ10月28日の別の葉書⁽⁴⁴⁾。

飛行船長メラシコリイ氏ハ昨夜七時薬価ヲ横領シテ失踪セリ返信、

ゆうべ榎町の料理屋で底がぬける程のみました、なんでも目の前に女が二人ちらついて居たことを覚えて居る、あなたに手紙をかくといつて大

騒ぎをやりました、女中が出した筈だ、届きましたか、心細い、昨夜位ふんするが不愉快な晩はなかつた、ふんするが大きらひになりました、

僕はつくづく寂しい、どうしようぞ、今朝おやちのめだまがこわいこわい、

冒頭と末尾の記述は、朔太郎が、遊ぶための資金を実家の財布から掠めていたことを示すものであろう。

「おやちのめだまがこわい」という記述はそれと関わっている。

11月16日の白秋宛の葉書⁽⁴⁵⁾。

のんだくれりずむにかんぶんしのんだくれになる、こんやこれからばあへゆくため、のまなきややつぱりでくのぼだ、のめばちんぼこふくれあがる、しよせんのみずばやりきれぬ、さけ、さけ、さけ、にんげんものはしらぬなり、ひさしぶりのおはがきになみださんらんいちれつりうていありがたしともありがたし、

同じ11月16日の白秋宛「第二信」⁽⁴⁶⁾。

すこし酔つて来ました
よつてくると女がほしくなる
たまらなく女がほしくなる
ああ、だれかたゞでやらせる女は居ないかな、
金が三十五銭しか財布にない、
いまや淫よく頂上に達す、このときつくづく女がほしくなる、金がほしくなる、女のほつべたがなめたい、襟くびにきずをしたい、
渋谷のやつはどうした、
京子はどうした、
SONOEのパトロンはいつのまにか逃げてしまつた、おい、だれか金をかしてくれ、二円程でいい、
室生の春子を引つぱつてこい、
KONOの未来をやつつけろ、

これから前橋市の娘を訪問して縁談の話をきめます、僕はあした結婚する、だれとでもかまはない、

僕はよつぱらつてエラクなる、京子なんぞたゞきつぶせ、エレナを暗殺しろ、

(中略)

BARの一隅にて、

ここには、犀星と酔いにまかせて、たがいの恋人について語り合った東京での交遊の有様を彷彿させながら、詩人仲間と過ごした一夜を懐かしんでいる朔太郎がいる。

さらに次の日、11月17日付の白秋宛の葉書⁽⁴⁷⁾。

ゆうべよつぱらつて侏儒社の連中と前橋中のモンマルトルを遊覧しました、東京景物詩をもつて玉突場に這入った美人を探偵するといふので大さわぎをやつたれども成效せず、先夜の手紙失敬しました、K君に内所にして下さい、

朔太郎は、のちエッセイ「浅草」(『映画芸術』1925年4月)において、浅草を「東京のモンマルトル」と呼んでいる。大都会東京での交遊を思い浮かべながら、地方都市前橋の盛り場で盛り上がっている朔太郎がいる。ここに見える「東京景物詩」という言葉が「東京遊行詩篇」と関係していることは明白であろう。

11月20日付の白秋宛の葉書⁽⁴⁸⁾。

この頃の私は実際へんです、不安の底に安住があり、安住の底に不安がある、にはかに瞳孔がひらかれて色々なものが見えます、今迄見えなかつた多くのものが薄ぼんやりと見えて来ました、(中略)如何にしてこれを文字に表現すべきやといふ段になると急にまごついてしまふ、絶望です、

同じ頃、朔太郎は、萩原栄次や木下謙二に宛てて自らの病気について報じている。これが「浄罪詩篇」生成の契機となったことは知られている。この時期は、まさしく、「浄罪詩篇」が生成される時期に当たっていた⁽⁴⁹⁾。と同時に、「浄罪詩篇」を生み出したのと同じものが「東京遊行詩篇」という作品群をも生み出したことは興味深い。

同じ11月20日付の木下謙二宛の葉書⁽⁵⁰⁾。

僕の方は辛い哀しみばかり多くて困ります、ゆうべまたBARへ出かけ一人で五合程のみへぐれけになつてしまひました、肉体を非常に苦しめ憔悴させたあとでは屹度佳い詩が出来るのです、今朝は世界第一の名詩をつくつた、

東京が急に恋しい。酔へば屹度上京したくなる、孤独な朔太郎の姿が浮き彫りになっている。東京への恋しさはいやまさるばかりである。

V 「東京遊行詩篇」の展開

「秋日帰郷一妹にあたふる言葉一」は『詩歌』1914年12月号に掲載された⁽⁵¹⁾。

秋は鉛筆削のうらゝかな旋回に暮れてゆく。いたいけな女心はするどくした炭素の心の触覚に、つめたいくちびるの触覚にも涙をながす。

しみじみと涙をながす。とき子よ、君さへ青い洋紙のうへに魚を泳がしむるの秋だ。真に秋だ。

あゝ、春夏とほくすぎて兄は放縦無頼、酒狂して街にあざわらはれ、おんあい至上のおんちゝはゝに裏切り、その財宝を盗むものである。

おん身がにくしんの兄はあまりに憔悴し、疾患し、酒乱のあしたに菊を摘まむとして敬虔無上の涙せきあへぬ痴漢である。

また兇盗である、聖者である。妹よ、兄の肉身は曾て一度も汝の額に触れたことはない。

見よ、兄の手は何故にかくも〜清らかに傷ましげに光つて居るのか、

この手は菊を摘むの手だ、

この手は怖るべき感電性疾患の手だ、

また涼しくも洋銀の柄にはしり、銀のFORKをして

しなやかに皿の魚を舞はしむる風月賀宴の手だ。

兄は合掌する。

兄は接吻する。

兄は淫慾のゆふべより飛散し散乱し、しかも哀しき肉身交歓の形見をだにもとめない頼廃徳者だ。おん身の兄はおん身を愛することによりて、おん身に一ダースの鉛筆と一かけの半襟ひとを買ふことにすら、尚かぎりなき愛惜の涙を、われとわれの真実至聖の詩篇に流さんとする者である。

兄は東京駒込追分の坂路に夕日を浴びて汝に水桃を捧げんとする。

想ふ、かつて内国勸業博覧会の建物に紙製の楼塔に似た一廓をなし、飛行機のプロペラその上に鳴る。

兄は哀しくなる、妹よ、都にあれば、しんに兄は哀しくなる。

すべては過去である、そして現在である。

遠ければ遠いほど、兄の真実は深くなり、兄の感傷はたかぶる。

妹よ、

黎明に起きて兄の生きた墓前に詣で、くれ。行く路は遠くとも、必ずともに素足かちにて徒歩まうでかし。なんちの白いあなうらもつめたい土壌と接触するとき、兄の恋魚はまあたらしい墓石の下によるこびの目をさます。その兄のめざめを感じ、おまへの素足に痙攣する地下電流の銅線をふんでわたれ。きけ、遠い遠い靈感の墓標で兄の精霊がおまへを呼んで居る。

妹よ、

み寺に行く途は遠くとも朝のちよこれいと興奮を忘れるな。

妹よ、

凝念敬具。

おんみが菊をさげて歩むの路を清浄にせよ。

あゝ、秋だ、

秋だ、

兄の手をして血縁けちえんの墓石にかゝやかしむるの秋だ。

妹よ、

兄が純金の墓石の前に、菊を捧げて爾が立つたとき、

兄はほんとうにおん身に接吻する。おん身のにくしんに、額に、唇に、乳房に、接吻する。

妹よ、

いまこそなんちに告ぐ、

われらいかに愛々してさへあるに、兄の手は、足は、くちびるは、かつて一度もなんちの肉身に触

れたことさへないのである。
とき子よ、
兄は哀しくなる、しんに兄は哀しくなる。

めいりいごうらうんど、靈性木馬のうへのさんち
まんだりずむをきみは知るか。
木馬はまわる、
光はまわる、
兄の肉体は疾風のやうに旋回する、
兄の左に少女がちつと立つて居る、
白い前かけをした娘だ、
娘のくちびるが、あかいくちびるが、林檎が、し
だいに、あざやかに、私のくちびるを追ひかける。
めいりいごうらうんど、
木馬がまわる、
世界がまわる、
光がまわる、
この廻る、むらさきの矢がすりの狂気した色の世
界に娘が立つて居る。
そうして、また、くちびると、くちびると。
秋だ、
兄の肉身はかうして靈感の天界へ失踪する、
はなればなれのくちびるとくちびると、
木馬は都会を越え群衆を越え雑圃を越え、いつさ
いを越えて液体空氣の圏中にほろび行くまで、
おんみよ、
異性のりずむとはかうも遠く近く夢みるごとく人
の世にうら哀しいものか、
浅草公園秋の夕ぐれ、
めいりいごうらうんど靈性木馬の旋回、
磨きあげた鋼鉄盤の白熱廻転だ、
想へ、切に切にそが上に昏絶せむとする兄の瘦せ
はてた肉身のいたましさを、
兄は畜生にもあらず、
兄は仏身にもあらず、
兄はいんよく極まりなき巷路の無名詩人だ、
いもうとよ、
なんちの信仰を越えて兄を愛するとき、なんちの
もろ手を合せてくれ。遠い故郷から、兄の真実の
ために聖母のまへに合掌して祈つてくれ。

秋だ、
すべて私を信頼し、私を愛するものゝために、私
はかぎりなき涙を流す。
いぢらしい私の涙は遠く別れた同性の友のうへに
もながれる。
友を思ふて都の高台にいちにちを泣きくらす。松
の青葉に晴れすぎし天景のおもひでにさへさしぐ
むものを。
いもうとよ、

光る兄の靴からかざりなき私の旅行紀念を吸
つてくれ、
魚に似たる手をもつて私の哀傷を撲つてくれ、
けふち、は、の家にかけらば、あした遠い都に兄
の生きた墓場をきづいてくれ、
菊の、光る、感傷の、純金の墓場をきづいてくれ、
妹よ、
兄の肉と血をもつて爾の愛人にはなむけるな、
兄の身は疾患廃唐のらうまぢすむ、
兄の靈智は遠いけちゑんの墓石に光るラヂウム製
の青い蛍だ、
妹よ、祈る。
とりわけてなんちのおきな兄のうへにも栄光あれ
かしと。

この作品について、大岡信は、その著「萩原朔太郎」
において、次のように論じている⁽⁵²⁾。

当時彼が書いた「遊泳」「秋日帰郷」「聖餐余録」
のやうな、やや長めの詩は、すべて「月に吠える」
からは外され、現在「拾遺詩篇」として別扱いさ
れているが、「秋日帰郷」や「聖餐余録」のやうな
詩は、もっと注目されていい。それらは語と語の
鋭角的な衝突のまっただ中に諧謔と錯乱の気配が
たえず醸成されて独特な世界を作り、詩的活力を
強く感じさせる詩篇である。

大岡の指摘は朔太郎の思想の形成過程を考えるう
えで重要である。ここで指摘したいのは、「秋日帰郷」と
いう作品は「東京遊行詩篇」との関連において捉えら
れるべきであろうということである。

ここに使用されている語彙を、先に検討した「東京
遊行詩篇」及びその草稿と対比してみたい。

たとえば「にくしん」という言葉は、「疾患光路」の
「いつしん供養、／にくしんに血をしたたらすの路、」
というフレーズ、「〈遠き〉室生犀星にくくる」の「あ
あ遠き室生犀星よ／にくしんをこえて」というフレー
ズが対応している。

「肉身」という言葉は、「狼」の「われはわれの肉身
の裂かれ鋼鉄となる薄暮を怖る、」というフレーズ、「祈
願」（「狼」草稿）の「われはわれの肉身のはがねとな
る夕をおそる」というフレーズ、「無題」（「狼」草稿）
の「われはわれの肉身の裂かれ鋼鉄となる薄暮をおそ
る、」というフレーズ、「晩景」の「ああ、かくてしも
わが身のおとろへ、／肉身をこえて涅槃に入るか、」と
いうフレーズ、「晩景」草稿の「ああ、かくてわが身の
〈涅〉おとろへ／肉身をこえて涅槃〈を感ず〉に入る
か」というフレーズ、「室生犀星に」（「孝子実伝」原型）
の「〈親〉肉身をこえてしんじつなる我の兄／くしんじ
つなる我の兄」というフレーズ、「蝕金光路」の「か
くしもわが身のおとろへきたり、／肉身くを〉を超えて
涅槃に入るか、」というフレーズなどが対応している。
また「「菊を摘まむとして」「この手は菊を摘むの手

だ「おんみが菊をさげて歩むの路を清浄にせよ」「兄が純金の墓石の前に、菊を捧げて爾が立つたとき」など菊にかかわる部分は、「晩景」の「この浅草に紙製の菊を摘み」というフレーズ、「晩景」草稿の「このく遠き東京に菊をつみ」というフレーズ、「銀座の菊」の「あしたの菊をぞわれ摘まむ」というフレーズ、「蝕金光路」の「ひとりしきたり紙製の菊を摘まむ」というフレーズ、「狼殺し」の「そこに菊をうえ／そこに松をうえ」というフレーズが対応している。

「紙製」という表現についていえば、「晩景」の「ひとしきり{紙製・早咲}の菊をつまむ」というフレーズ、「銀座の菊」の「また空には光るまつ虫、／おほいなる紙製の花もひらくころほひに、」というフレーズ、「銀座通の菊」(「銀座の菊」草稿)の「おほくひいなる{酒毒の}紫蘇の花くも咲くころほひ・紙製の花のひらくころほひ」というフレーズ、「蝕金光路」の「ひとりしきたり紙製の菊を摘まむと、」というフレーズなどが対応している。

「畜生」という言葉については、「狼」の「そゝろに我は畜生の肢体をおそる、」というフレーズ、「祈願」(「狼」草稿)の「もとめくきたるくあくなきものはく乞食→畜生」狼なり／(中略)／そゝろに我は畜生の心をおそる／(中略)／畜生の心を知らず」というフレーズ、「無題(く狼きたる)」(「狼」草稿)の「そゝろに我はく狼畜生の肢体をおそる」というフレーズ、「疾患光路」の「犬、畜生をして純銀たらしむる、」というフレーズなどと対応している。

「聖餐余録」は『地上巡礼』1915年1月号に掲載された。冒頭に「食して後酒盃をとりて日けるは此の酒盃は爾曹の為に流す我が血にして建つる所の新約なり、／一路加伝二二、二〇、」というエピグラムが付されている⁽⁵³⁾。

鐘鳴る。

我れの道路に菊を植ゑ、我れの道路に霜をおき、
我れの道路に琥珀をしけ。

道路はめんめんたる一列供養のみち、夕日にけぶる愁ひの坂路、またその坂を昇り降らむとする聖徒勤行の路でもある。

鐘鳴る。

鐘鳴る。

エレナよ。今こそ哀しき夕餐の卓に就け。聖十字の銀にくちづけ、僧徒の列座を超え、雲雀料理の皿を超え、汝の香料をそのいますところより注げ。ああ、いまし私の輝く金属の手に注げ、手は疾患し、蝕蝕し、するどくいたみ針の如くになりて、触るゝところ、この酒盃をやぶり汝のくちびるをやぶるところの手だ。

ああ、いま聖者は疾患し、菊は疾患し、すべてを

超えて我れの手は烈しく疾患する。

見よ、かがやく指を以て指さすの天、指を以て指さすの墳墓にもある。その甚痛のするときこと菊のごときものはなく、菊よりして傷みを発すること疾患聖者の手のごときものはない。

愛する兄弟よ。

いまこそわが左に来れ。

汝が卓上に供ふるもの、愛餐酒盃の間、その魚の最も大なるものは正しく汝の所有である。

爾は女の足をひきかつぎ寝ることによりて、その素足に供養し流涕することによりて、爾の魚の大をなす所上である。

まことに夜陰に及び、汝が邪淫の臥床にさへ下馬札を建てるところの聖徒である。

凡そ我れの諸弟子諸信徒のうち、汝より聖なるものはなく、汝より邪慾のものはない。乞ふ、われはわれの肉を汝にあたへ、汝を給仕せんがために暫らく汝の右に座することを許せ。

ああ、この兄弟よ、ふうしきんの徒よ、爾は愛するユグである。我をあざむき売らむとし、我を接吻せんとする一念にさへ、爾は連座頌栄の光輪一人負ふところの聖徒である、「愛」である。

愛する兄弟よ。

而して汝は氷海に靈魚を獲んとするところの人物である。

肉親の骨肉を負ひて道路に踏行し、肉を以て氷を割らんとするの孝子伝奇蹟人物である。

みよ、汝が匍行するところに汝が蒼白の血痕はあり。

師走に及び、汝は恒に磨ける裸体である。汝が念々祈禱するときに、菓子^{ツギ}の如きものの味覚を失ひ、自動電話機の如きさへ甚だしく憔悴に及ぶことあり。

汝は電線を渡りてその愛人の陰部に没入に及ばんとし、反撥され、而して狂奔する。況んや爾がその肉親のために得るところの鯉魚は、必ずともに靈界天人の感能せる、或はその神秘を啓示するところにならざるべからず。

愛する兄弟よ、まことに師走におよび、爾は裸体にして氷上に匍匐し、手に金無垢の魚を抱きて慟哭するところの列伝孝子体である。

諸弟子。

諸信経の中、感傷品を超えて解脱あることなし。万有の上に我れをあがめ、我れの上に爾曹のさんちまんたるを頌栄せよ。

今宵、あほぎて見るものは天井の蜂巢蠟燭、伏して見るものは女人淫行の指、皿、魚肉、雲雀、酒

盃、而して我が疾患蝕金の掌と、輝やく氷雪の飾
卓晶峯とあり、
みよ、更に光るそが絶頂にも花鳥をつけ。
ああ、各々の肩を超え、しめやかに薫郁するところ
の香料と没薬と、音楽と夢みる香炉とあり。

諸使徒、

われと共にあるの日は恒に連座して酒盃をあげ、
交歓淫樂して一念さんちまんたりずむを頌榮せ
よ。

蓋し、明日炎天に於て断食苦行するものはその新
発智、道心のみ、もとより十字架にかゝる所以の
ものは我れの涅槃に至ればなり。亜眠。

一人魚詩社信条一

この作品も、また、「東京遊行詩篇」との関連において
読み解かれるべき作品である。とりわけ、室生犀星
に宛てて書かれたこの作品に、「孝子伝奇跡人物」とか
「列伝孝子体」など、「東京遊行詩篇 三」と推定され
る「孝子実伝——室生犀星に——」を連想させる言葉
が見えることが注目される。

先の「秋日帰京」と同様、「鐘鳴る」「素足」「壺魚」
「師走」などをはじめ、多くの語彙が「東京遊行詩篇」
と共通することを指摘することができる。

註

- (1) この点については拙稿「萩原朔太郎研究・補遺（そのⅠ）」
（『哲学と教育』2003年3月）においても触れたので参照いた
ただければ幸いである。
- (2) これを〈全集のイドラ〉と呼ぶ。前掲拙著においては、「浄
罪詩篇」の研究が従来、詩集収録形をテキストとしているため
に、初出形や草稿の段階で、「浄罪詩篇」のうちに〈疾患〉の
テーマが隠されているのを看過してきたことなどを指摘し
た。なお〈全集のイドラ〉については、『図書新聞』2004年7
月3日号所載の「渡辺和靖氏に聞く『保田與重郎研究』一九三
〇年代の時代精神 保田與重郎の思想形成を跡づける」のな
かでも触れているので参照されたい。文中に「フランシス・
ペーコンのいう三つのイドラに加えて、私が第四番目として
考えたイドラです」という部分を、ここで「フランシス・ペー
コンのいう四つのイドラに加えて、私が第五番目として考え
たイドラです」と訂正させていただきたい。
- (3) 『全集』第1巻、40頁。
- (4) 同、31頁。
- (5) 前掲拙著、187～8頁参照。
- (6) 『全集』第1巻、362～3頁。
- (7) 『全集』第3巻、92～3頁
- (8) 同、434頁。

- (9) 『全集』第1巻、362頁。
- (10) 同、311～2頁。
- (11) 同、417～8頁。
- (12) 同、418～9頁。
- (13) 『全集』第3巻、99～100頁。
- (14) 同、441頁。
- (15) 前掲拙著188頁参照。
- (16) 『全集』第3巻、266～7頁。
- (17) 同、461頁。
- (18) 同、267頁。
- (19) 同、96頁。
- (20) 同、270～1頁。
- (21) 同、461～3頁。
- (22) 『全集』第3巻、437～8頁。
- (23) 『室生犀星全詩集』第1巻、579～80頁、冬樹社。
- (24) 前掲拙著、326頁参照。
- (25) 『全集』第3巻、265～6頁。
- (26) 同、460頁。
- (27) 同、440頁。
- (28) 同、249～50頁。
- (29) 同、268頁。
- (30) 同、269頁。
- (31) 『全集』第2巻、523頁。
- (32) 上京の日付については『全集』『年譜』と久保忠夫氏の間で
異論がある。前掲拙著200頁参照。
- (33) 『全集』第13巻、54頁。
- (34) 同、55頁。
- (35) 同、56頁。
- (36) 同、59頁。
- (37) 同。
- (38) 同。
- (39) 同、61頁。
- (40) 同、62～3頁。
- (41) 前掲拙著196～7頁参照。
- (42) 『全集』第13巻、61頁。
- (43) 同、63頁。
- (44) 同。
- (45) 同、68頁。
- (46) 同、68～9頁。
- (47) 同、69頁。
- (48) 同。
- (49) 前掲拙著189～90頁参照。
- (50) 『全集』第13巻、69～70頁。
- (51) 『全集』第3巻、149～54頁。
- (52) 『萩原朔太郎』110～1頁、1981年、筑摩書房。
- (53) 『全集』第3巻、166～9頁。

〔付記〕引用文中、固有名を除き、新字体のある漢字はそれに改
めた。

(平成16年9月15日受理)